

船はいよ／＼碼頭を離れる。蘇州を指して東へ向け舵を操る。それからの運河は幾分幅も廣くなる。船は満員、白帆に風を孕み、追手で歸路を急ぐ。誠に滑るやうである。見るうちに蒙古風が吹きすさぶのであるが、街外れを出てから殊に著しく速力が出る。船は春風を十分に孕んで橋も折れんばかりになり、船體が傾いて來た。

同じ運河を行く民船共は我れも／＼と烈風の間に漕ぎ寄せ、そのスピードを出して進行してゐる最中、艦綱をわが船に投げ巧みに結付け曳張つてもらはうとしてゐるのである。二杯食つ附けられ三杯くつ付けられ、四杯くつ付けらるゝと云つた風に見る／＼七、八杯の船が珠數繋きにつながれた姿をとつた。

船は烈風を追手に受けた。走るも／＼實に速く走る。その爲めに事故遭難の虞れでもないかと心配されるくらゐであつた。さういふ時の船頭の操縦振りを見ると又手に入つたもので、これ又ぶこつな荒削りの操縦術の中に巧みな曳船振りを發揮したのであつた。といふのはその極度の烈風に弄はれてゐるに拘らず、その間に或はともづなを繋ぎ、或は艦綱から之を離すと云つたそのあたりの離れ業はとても膽を冷からしむるに足りるものであつた。

蘇州の街外れに近い水郷に這入ると、岸に沿うて寧紹、殞舎など云ふ白壁がズツと並んで見え

る。こは他地方から來たものでこの地に客死した者のなきがらを納めた棺桶を此處に藏してゐる處である。

船便のあるとき、都台を見てそれ／＼郷里へ持運ばれるといふわけなのであるが、多くは田舎に持つて行く運びにならず殞舎に入れられたまゝ此處へ永久に置かれることになるものが多いのである。又蘇州城外ウーメンチャオ（吳門橋）近くなると鵜飼をしてゐる船を見たり、或は陶器を焼いてゐる窯元の工場を見たり、又その煙突の黒煙を濛々と天に漲らせてゐる凄じい光景を見たりなどするのである。結局船は大風と闘ひつゝシーメン（胥門）に着き、四時半といふにボンメン（盤門）二馬路の日本領事館に歸りつきこゝに川南領事と會つたのである。

すると領事館では自分の歸館が豫定より日が経つてゐるので、一同の心配は一方でなかつた由を語らるのである。署長も或は自分が人質となつたのではなかつたかなど、明け暮れ心配をして呉れてゐたこのことを聞かされた。併しともかくもこの通り無事に歸り着いたのを見て一同はひどく安心をせられた。そしてゆつくり太湖の海賊村を巡つた間の體験を一伍一什を語り、又深更まで書畫、翰墨の話に耽つたのであつた。當日は上海からのYMCAの蘇州觀光團など見え相當館内館外は賑つてゐた様子であつた。

それから蘇州着の翌朝のことである。朝早く自分はからだを休めるひまもなく朝早く常熟行を志し出發を急いだのであつた。けれども蘇州チャオチャオ（弔橋）の碼頭に朝八時五分に着いたため、行つて見ると五分前に既に常熟行の船は出てしまつてゐた。已むなく午後零時半かつきりに出る船まで待つことにした。

それまで自分は城内の散歩をし、土俗を見ながら、邊りの様子を見廻つた。呉服、雜貨店から家具屋、刺繍工場、金物屋など、何くれとなく時間潰しに見て巡つたが、そのうちに太鼓を造る店と蘇州料理を作る料理場とは最も興味深く感じた。殊に太鼓の工場では、四五尺の長い棒を幾本か組み、その兩端に一つづゝの太鼓の胴を嵌め、之にかたく皮を張りつけようとしてゐるのである。

その皮の張り方と云ふが見てゐると非常な力を以てびつたり之にくつつ付かしめんが爲め、更に幾條かの綱を用ひ、兩方の太鼓の面を出来るだけ固く縛りつけてゐる。その綱の中間を更に又ねぢりねぢつて之に唐木のクサビを差込み噛ませ、腕の力のあらん限り更に之をねぢつては第二第三のクサビを差込んでゐるのである。

すると綱は張りつめ形になり、同時に框に貼られた皮は益々緊密状態になりびつたり密着する

のである。その時職人の腕に見る筋肉は鳴り、見る／＼筋肉は瘤の如く凸状をなし、力の這入つた雄々しき姿が勇ましく眺められる。その全身に汗して之を作上げんとしてゐる所は如何にも神聖に見える。

その胴の周圍に鉄一つ打つにしても渾身の力を籠め、二打ち三打ちする間にその暇のかゝることとは勿論だが、又念入りに心を籠めてゐる所の眞摯ぶり、その技術は全く興深く眺められるのであつた。

さうして自分はその日の午後の船をつかまへ常熟へ向け發つたのである。

落ち付く先は常熟の田舎、蘇州から東によつた片田舎である。これは海賊村でなくしてこゝに豫ねて憧れの山寺シンフース（興福寺）を尋ね、又緑毛龜の養龜の飼ひ方を見たりなどするといふ考へであつた。

出来れば禪寺のターウゲン（大和尚）にも會ひ、禪を聴く事の出来るのを切めてもの望みにしてゐたのであつた。支那の出船はいつも時間がよい加減であるが、こゝばかりはかつきり正しいことと夥しい。この碼頭の時間の正確なるには實に驚いた。零時半かつきりに汽笛が鳴る。するとさつさと運河を走り船出したのであつた。

我が船は一錢蒸汽、乗台客の中には常熟の田舎、武進の放生禪寺の僧侶や崇法禪寺の僧侶なども乗合はせてゐた。丁度折りよくこの二人の僧侶は自分と同じ常熟の興福寺に行かんとするもので誠に願つてもない宜い乗合客であつた。

又船中にはこの界隈の古老の紳士や老農、又子供を連れた内儀さん達、その他商人など、色々乗合客がゐてくれた爲め、船中は頗る朗かであつた。幼児を中心に罪なき話題が出たり歡聲一時にどつとあがり賑かであつた。

そのうち船中の一同は、自分が日本から来た客であることを知り、それからと云ふものは種々な奇問が發せられるのである。

或る紳士は自分に聞くのである。「日本の婦人は脊中に一尺大の布で張つた四角の浅い太鼓を負うて居るやうだがあれは一體何ですか」餘りの奇抜な質問に自分は始め考へ付かなかつた。併し色々その質問が繰返されて来るので直ぐ合點が行つた。

といふのは、それに黒の繻子があつたり、柄物があつたりといふので、それは婦人が帯を結んでゐることを問ふてゐることが判つた。そこで「あれは帯の結んだ形ですよ」と言つた。ところが「でも箱の姿をしてゐるぢやないか、何の必要があつてあゝいふ形に作つてゐるのか」など、

云ふ。餘計な物を背負うてゐると思はるゝと見え頗る疑念を挿んでゐるのである。

又「日本の女は足が牛の蹄のやうに二つに割れてゐると云ふ。足袋の形を見ても前が二つに割れてゐる。これは一體どういふわけなのか」と言つてゐるのである。成る程支那の女は靴を穿いてゐるから割れて居らない。履物の關係で斯様に見らるゝのであることを話してやつた。ところが、一同話がわかり又どつと笑ふのである。

四方山話やら風物の話で種は次から次へと盡きることがなかつた。時の移るのも氣が付かなかつた。彼れ是れ八時頃暗闇の中に常熟の公茂碼頭へ着いたのである。

船へ迎えに来る田舎辯の老若男女、宿引きなど可なり水邊に雑沓を極めてゐるのである。自分達は件の兩和尚と共にゆつくり最後に上陸したのである。

陸にあがると、和尚達は食事の相談を自分に持出して「あなたはお腹が減つたらう、何處か食事をしようでないか」と言つた。自分は「精進飯が宜からう」と言つた。ところが二人は普通の飯屋に這入る。そして成るべく自分の氣持を損じさせないやうに土地の生臭い料理を誂へて呉れる。さうして和尚二人は特に精進飯を作らせてゐたところなど心配りの程が見えてゐた。

食事がすむと菜館のボーイを連れて、邊りの縁毛龜を飼つてゐる家をわざ／＼二三尋ねるため

自分を案内するのである。それから腕車を驅つて城外に出で田舎路を辿つた。十支里の路を畦路傳ひに行く。お先眞つ暗らな田圃の中の路で時折り墓場などが腕車の長柄の傍に見えてゐる。その他は暗み路のことゝて何も判らない。たゞ兩和尚を信じて引かれてゐるのみである。行けどもくたゞ田圃の中の暗黒裡のうちばかりである。次第に山手らしく感ぜらるゝ方に路が折れ曲つて行く。そのうち興福禪寺の第一の門らしきところに来た。更に十丁餘り行つてやつと第二の門即ち本當の山門の前に出た。邊りは老樹の並木で如何にも静寂の境地であり、日本で云ふと越前永平寺の山門前のやうな感じのしたところである。けれども、暗夜のことで薩張り見當が付かないのである。

門を叩き來意を通ぜんとすれども、寺が大きく門内深くして誰れ人の答ふるものもない。門扉を打てど叩けど誰れ一人出て來る者がない。車夫も力を入れ三人聲を合せて嗷鳴る。けれども尙ほ答ふる所がないのである。已むなく丘の細徑を辿り六人で聲を合せ張り上げて見る。それでもまだ返事がないのである。

邊りは静かな山である。けれども、その大規模の禪寺であるが爲めと今一つは嚴重に取締りの出來てゐる爲めとで、僧坊のところまで聲が達しないのである。又明一つ外に漏れてゐる處がな

いのである。悪くすると自分どもは折角此處まで來たが門前樹下で露營でもしなければならぬかとも思はれた。しかし根氣よく幾度も横門に廻り、之を叩き聲を張上げてゐたところが遂にやつと返事があつた。そして小さい提灯を提げた僧侶が出て來た。これで初めて闇路に救ひの手を得ることが出來た。

十五、海賊の本場溧陽へ

71 王石谷先生故宅

江南の田舎は幾ら風流な眺めがあるとか、景色がやさしいとか云つて見たところで、それは晝間目で見たと時の話である。暗夜見ず知らずの不案内な田舎に分け入るといふ時には全く一寸先は闇の夜である。だからどう判断を付けてよいか薩張り分らないのである。

灯の明はせめてもの同伴である。又路連れになつてゐるものはその人次第であるがいくらかたよりになる。でもその人相によりその田舎の旅は面白くもなり又不愉快にもなるのである。随分知らぬ深山に行暮れて、尋ねるに人も無く透りに道しるべも立つて居ず、全く路頭に迷つたことは一回や二回でない。萬里の長城以北、山西の片田舎大同の曠野のたゞ中で全く路を失うたことなどもある。

江南の天地は、幾ら暗み路にお先眞つ暗と云つて見たところでもまだくさう心配したもので

ない。ところが不案内のところでは夜半猛犬に出つくはしたり又墓場の石人石馬に出つくはしたりなどすることがある。それも晝間であればすべて何でもないのである。

自分は或る日、連日常熟の禪寺に客となり、寺籠りをしてゐた際、時折り山門を出て背後に欽つ劍山の絶壁を尋ねたり、或は空心潭の池畔を逍遙したりなどしてゐるうち、禪寺の正道和尚と共に散策しその案内でこの邊りの山野一帯を跋涉した。そして歸途常熟の城内に画人王石谷先生の故宅を尋ねる機会を得たのである。

王石谷先生は四王巨擘の一人であつて、支那繪画史の上では誰れ人にも知られてゐる。今その子孫は故宅を守り、鹿柴の雅門さゝやかに眺められてゐる。見るからにその家族どもは小門の内

に佗び住ひをしてゐる。門内を斜めに右へ這入つて見ると、突當りの小室に石谷先生の遺物が今も尙そのまゝ陳列されてゐる。又庭前の平地には數十の土燒の壺が大小色々の形で並べられてゐる。

見るとその内に水がそれ／＼三分の一位に這入つて見事な緑毛龜が飼はれてゐるのである。龜は首元から甲背全體にかけて見るも鮮かな長毛を生やしてゐる。さながら天下の瑞祥を物語つてゐるかのやうに拜せられたのであつた。今王家の當主は、可なりの老人で、終日この龜の世話を

することを以て何りの嗜みとなしてゐるらしい。家庭では、よく蘭を作つたり牡丹を栽培したり、晴耕雨讀の生活に這入つてゐるものを見るが、斯う云つた世俗を脱却した餘生を送るうちにこの緑毛龜を仕立てるといふ趣味ばかりは又世にも珍らしい嗜みであると云へる。恐らく支那四百餘州中から云つた故宅に於て初めて之を見るのである。その程遠からぬ水郷には名にし負ふ海賊の本場の控へてゐるところがある。それにこの常熟に斯う云つた珍らしい龜を飼ひ之を命よりも大切に、面倒を見てゐる者があるとは愉快な話であると思はれたのである。

72 無陽から溧陽へ

自分が常熟の興福寺に入りこゝでお籠りしてゐる間には、三百有餘の山僧雲水、小僧達を相手にして連日賑かな讀經に加はつたり、又大雄寶殿の式を見たり、鳴り物入りの佛事、地獄極樂の掛軸の觀賞、又大規模の炊事場から點心部屋などの見學をしたりなどしてゐたのであつた。

正道和尚とは毎日その方丈の室にて文學を語り、篆書を揮毫し、時には經文全部を書上げたりましたことあるなど、可なり翰墨生活に耽ることが出来たのであつた。

併しこの寺にゐて最も興味のあつたことは化燈禪師との對話交遊であつた。

化燈禪師はいつも自分の客室の隣に起臥して居つた。その姿は首も頭も胴も同じやうな大きさの肉の塊と云つたらよいやうな恰好をした人で、唇厚く、容貌魁偉。併しどことなく溫容人に迫る如き風格の持主であつた。

朝は未明に自分の寢臺の處に來る。そして靜かに我が寢顔を見てゐる。目が覺めて見ると兩方で相見互にニヤツト笑ふのであつた。又翌日にはこちらから出掛けて行つて同じ方法でお返してゐたりなどしたのであつた。

山下で小便をする時などその用達しのすんだ後、法衣が水で濡れてゐるやうなことがあらうと何等お構ひがないと云つた無頓着振りを發揮してゐる老師であつた。

興福寺では盡きぬ名残りを惜しみ自分は山門前まで見送つてくれてゐる圓頭の連中に會釋をした。そして飄々呼々として山門を後ろに別院さして立つ。かくてこゝに最後の夜泊を體驗し碼頭から船出したのであつた。

運河により漕ぎ出て見ると「先賢言子之里」など云へる石柱を仰ぎ見たのであつた。自分はかつて山東曲阜の孔子廟で言子の神位の祀られてゐるのを見たことがあるため懐かしく思はれたの

であつた。

やがてこゝから無錫の橋下まで下る間は兩岸、桑田菜種の畑は、今まで通つて来た水村、趣と變つてゐない。がたど無錫界隈は織物の盛んな工場地帯であるので極めて景氣の好い雰圍氣が水郷に漲つてゐる。立派な輪船の去來や、江上の白壁、土豪の邸宅、着飾つた行人の姿などが目に付くのである。文人墨客の間では太湖の湖畔梅林で名を得た梅園が邊りの雅人風人の噂さとなつてゐるのであつた。

併しこゝには又變なことがある。と云ふのは友人の一人で最近此處で蘭花の展覽會を見に来たばかりに城内で捕まり、官憲からきつい訊問を受けた揚句、牢屋に放り込まれた話がある。そうして幽閉同様の取扱ひを受けて随分苦しんだとの事である。幽閉された鐵門の内には各種の罪に問はれた手合、又未決犯の連中の收監されてゐるのがゐる。その手合の中には役人と金の相談ごとが持上つてゐるのである。

その一例を言つて見ると、かうである。今から君に尙ほ一ヶ月も獄屋生活をさせると、食料品が幾らいくら掛かる。よつて今それと同額の金を此處に出し、更に何物か色を付けることをするならば君は出獄をさせるやうに心配してやるがどうか。

地獄の沙汰も金次第とは昔から云ふことであるが、まるで露骨に罪と金との取換つこの相談みたやうなことが持上つてゐるのである。

又中には淋病で痛みを覚えてゐる手合がゐる。すると傍からその治療の藥の名前、調合の分量などを詳しく物語つてやると、ひどく有難がり、それを教つた關係から思はず懇意になつて遂に罪を軽くして出獄の期を早めて呉れたなどいふ滑稽な話もあつたさうである。

中には虱を取つたり、かさぶたをほじくつたりなどしてゐる手合もあるとのことである。どうせ科人の寄集りである。見た感じは好くはないにきまつてゐる。けれども、存外その間に又のびやかな朗かな氣分も無いではない。これが無錫の獄屋の中の大要として、耳にした所の大體である。

豫て南京の監獄を自分は親しく見廻つたことがある。その内部には手錠足枷を嵌められてゐる者があり、或は家族との面會を許され話をさせてもらつてゐるが監視人が側にゐて長く話さしめず、時間が來ると直ぐ袖を引張つてつれて行つてしまふなど云ふところもあつた。けれども庭には牢屋と思へないくらゐの花壇が設けられてゐるし、又奥まつた硝子入りの大室では日光浴に適してゐるところが見られる。丸でサンルームである。

國事犯と云ふ札付の者でありながら家庭から衣裳を取寄せて見たりするものがあり、手を拱き朗かな顔をしてゐたりするものもあり、内部を賑かしてゐる。流石は支那の獄屋だけあるわいと思はしめられたのであつた。之を思ひ彼を考へると、支那の牢屋の中は寧ろ志願してでも入れて貰ひたいやうな感じが土着民の間に確かにありさうであると察せられる。體面のことよりも、一度味を占めたものは外の娯婆へ出たくなくなるといふ氣持が確かにあるのである。

かやうな牢屋生活のことがしきりと自分の頭の中を去來する。この無錫の城内城外は經濟的に繁昌した所であるとは云へ、見方によるとこゝは太湖界限切つての第一繁華な場所であるだけに昔から相當その奥地の海賊土匪の手合が之に目を着けてゐたところであつたであらう。たしかに金穴ドル箱でもあつたであらうと察せられるのである。

自分は無錫で橋の袂の無錫旅館に支那名の「藤石農」の三字を署名し投宿した。こゝには別段日本人たることを云ふ必要もなく、又帳場でもそれが判らなかつたらしい。が、そのとぼけた彌次喜多行脚をしてゐたので少なからず變つた體験をなし見聞もひろむることが出来たのであつた。無錫界限の行脚彌次喜多を終へた後、旅館の直ぐ前の碼頭から朝の七時といふのに、霧の中を破つて一錢蒸汽で立つた。こゝから毎日海賊の本場漂陽指して船が出てゐるのである。無錫から

太湖の北べり水郷を運河傳ひに行く間、船のつくところは先づ、洛社、戴溪橋、運村、和橋など云ふを初めとし幾多の碼頭がある。之に一々船は寄港するのである。時折り船着き場の民家の門に氣をつけてゐると次のやうな洒落た聯句が見當たる。

丈夫貴三立志一

君子不憂貧

運河を去來する船は何れも相當の金目な貨物を搭載してゐる。中にも海鼠燒の瓶、壺、甕、火鉢などを山積みにしてゐる大きいのが目につく。恐らく此あたり昔から海賊の出沒するといふのも斯う云つた運河に金目の貨物財寶の動きが見られることが海賊の心を牽いてゐるのではあるまいかと察せられたくらゐである。

73 宜興蜀山の窯元に客となる

太湖の西岸に蜀山と云へる窯元がある。これは燒物の方面でよく知られた宜興の一つの分れである。朱泥白泥の産出がその特徴となつてゐる處である。その規模は實に大きい。その圓錐状をなせる山の麓から頂に向つて幾筋となく火炎が上へくと燃え上るやうな仕掛に出來てゐる。總

べての窯が焼かれてゐる時之を遠望すれば山火事の如くに見え、又噴火山の煙を吐いてゐるかのやうに、眺められる。

無錫から宜興に達するには船で湖水を渡る。又運河を行くとすれば先づ一日行程で十分であるのである。自分は豫て上海城内で蔣先生からの紹介を得てゐた。そこで都合よく行きなり蜀山の工場を訪ね、汪澄林先生に會ふことが出来た。そしてこの地に來遊したのはこの度が初めてであることを述べた。

焼物については景德鎮その他磁洲など殊に古陶についての憧れを持つてゐる事などを何と云ふことなく、語り出したのでひどく叮嚀に取持つて呉れた。汪先生から一つ充分焼物の實況を研究して行つて貰ひたいとふ話が始つた。そして云ふに自分の家へ逗留して呉れ、お宿をしますからといふことになつた。

宜興は名にし負ふ宜興焼の本場であるし、海鼠焼の窯元鼎山と相並び太湖の界隈切つての大工場地帯である。その爲めに湖濱の、片田舎ではあるけれども、運河沿ひの兩岸を初め村にみなぎる活氣と云つたら大變なものである。

窯から取出された焼物は大物小物とりぐで運河べりの原つばに山と積まれてゐるし、又家々

にはその在庫品が殆んど無限に藏せられてゐる。

汪先生の宅は、石橋を渡り、左手の二階家であり、その界隈での目抜き場所にある。その隣には荒物屋があり、向ひには茶館があり、橋の袂には又相當な茶館があり、橋を向ふへ渡ると浴室がある。かう云つた調子に總べて小さい村である割に整つた處である。汪先生は自分の爲めに店の二階の一間を提供して呉れた。

二階と云つても倉庫の一部分のやうな所でま事に手狭である。床板の中央部は板の實になつてゐて階下に如何なる客が見えたか、どういふ人の出入りがあつたかゞすべて皆手にとるやうに判る。之に寢臺が置かれてゐて、その蔭に小便するための青磁焼の便壺がおかれてゐた。

窓は低く路幅はせまく手を伸ばせば向ひの茶館「徳義樓」の窓に手が届くくらいである。茶館の軒にぶら下げられた圓い鳥籠には夜は黒い布が覆さつてゐたが、晝間はそれを取り去つて現はしてゐる。小鳥の囀る音が又大變愛らしかつた。

毎朝目の覺むる頃になると汪先生が自分の部屋を訪ねて呉れる。そうして自分で青磁焼の便壺の世話までして呉れるので恐れ入つた。翌朝はあまり恐縮なわけ之を自分で始末しようとする

と又先生が機敏に早くやつて來てそれを片付けてくれるのである。

ボーイであつてもそれを掃除することは嫌ふものであるのを主人自らが之に氣を配ばると云ふに至つてはその至情がありがたい。こは客に煙草をすゝむるとき燐寸をとり主人自らが客の爲めに火を點けて呉れる風があるが、その親切ぶり以上の取持ち方であるので心から感謝してゐたわけである。

汪先生は自分を案内して室を出ると行きなり向ひの茶樓に行く。そこで湯を買求めて顔を洗ふのである。茶館の二階には床に孔のあいてゐて、下の竈場の見おろせる所がある。そこから一々釣瓶式に綱で手繰り薬罐で湯を運び上げてゐるのである。

大抵朝の五時頃には邊り近所の客が皆これへ詰め掛ける。そして卓といふ卓は皆客がつめかけ満員の態である。だから遅くでも行くと先客の席から立つのを待つてゐなければならぬからである。

卓上には熱茶が出、又、生姜の切つたのが出る。又西瓜の種だの、南瓜の種だの、長生果(落花生のこと)だの云ふが出る。

部屋の正面中央には窓際に何時も毎朝見事な首の太い丸顔の老爺が席を占めて愛想よく色々の客のお相手をしてゐるのが見える。汪先生に自分は聴いて見た。

「あの老爺はどういふ人ですか？」と言ふと「あれはこの蜀山の窯元切つての元締めで有力者なのです」と言つてゐた。

「紹介をするからあの卓へ行きませう」と云つて自分ども共に茶を飲んだがその老爺は實に打解けた面白い老人であつた。自分が遠來の客であると判かつたか、色々親切に話をして呉れた。さうして云ふに、轆轤細工をしてゐる工場やら窯の内部やら又色々製作品の陳列してあるところなど見せてあげるから私の家へ來ませんかと言つて呉れた。

村の茶館に集まる人々はこの樓上を以て一つの俱樂部と看做してゐるらしく、仕事の打合せ、商ひの相談、荷造りの話、積荷の話、工賃上げの話、村費の話、夜廻りの話、何でも此處で相談し合ふのである。

この蜀山は大きい村ではない。けれども、まことに和氣霽々たる自治氣分に燃えた村であり、又、相當富裕な村のやうにも見えてゐた。

大抵朝は七時頃になると、村の者は總べてこの茶館から姿を消してしまふ習慣である。さうして近村の者や旅の人が今度は之と入り代りに集まる。客だねはスツカリ一變してしまふのであるそれから面白い。中には鳥籠を提げて來る者があり、鼻唄を歌ひながら段を上つて來る者があ

る。これ亦和氣霽々の氣に溢れてゐる。

汪先生は毎朝朝飯と云ふとうちでとらず、きつと橋の袂の茶館へ自分を連れて行つて野菜、魚肉、それ／＼その分量を定め、注文をして料理させるのである。

又お隣の荒物屋に行つて見るとそこには、油、砂糖、紙類、穀類、何でも取揃へられてゐる。その油壺から計り賣してゐる様子、又砂糖を秤で掛けてゐる様子、穀類を計つてゐる様子、如何にも村の生活だけに細かくさうして几帳面である所が見える。

朝の茶館の賑ひと同じやうにこの荒物屋の店頭が又繁昌してゐる。すべてどこを見ても斯んな風で氣持がよい。家庭的氣分で温かく取扱つて呉れるのである。物質の點は兎も角としても村の生活程度として心一杯のところをやつて呉れてゐることがよく窺はれるのであつた。それから自分分は窯元の方から轆轤を回してゐる例の好好爺の老人のゐるところへ案内された。

行つて見ると、暗い軒の低い工場であつたが長い臺に、澤山の内儀さん達がゐる。そして土を捏ねたり轆轤に掛けたりしてゐる所、殊にその轆轤と云ふは軸が無くしてだゞ廣い臺の上でゴロゴロ轉がしてゐるだけである。他所見しながらエロ話をやつたりなどしてゐるところ實に呑氣さうに見えてゐる。こゝである。そこには生乾きの小壺が四五十も壁に沿うて並べられてゐた。

かう云つた長閑な氣持で焼物が造られてゐるのであるから、自然支那焼と云ふものは風流に出来上つてゐるわけである。日本のその如く唯だ完全無缺に缺點のないやうにのみと目を瞞らし頭を痛め鬨志に満ちて造られてゐるやうな藝術品とは丸きり違ふ。釉薬を掛ける處や、又仕上げの砥石をかける處、それ／＼細かく見せられたのである。又運河を船で鼎山の方までも共に尋ねたのであつた。

かくの如くして焼物行脚に耽つてゐるうちに自分は時に浴堂にも參つて見たり、又汪先生の友達の家庭へも訪ねて行つたりなどした。この村の風呂と云ふは澡堂で共同風呂であつた。脱衣場から貸手拭を提げ、木履を引掛けて浴槽に臨むのである。その木履は日本式のものとは違つて緒が附いてゐない。方形の厚板の面に一寸ばかりの頭の太い棒の挿されたのを親指に引掛けてあるくと云つた者である。汪先生は風呂の中でも、茶館でも、茶館でも、到る處で自分を村の人に紹介し、さも日本から来た珍客でもあるやうに觸れ廻るのである。そのため常に自分は支那服であつたが逗留中衆目の目標となつてゐた形であつた。

家庭に在つては自分はずとめて兒女や細君、母堂達と暗いランプの下で卓を共にし團樂の樂しみを味つたのであつた。食事が濟むと何時も直ぐ寢室に行く決りであつたが、夜半二時には二時

の夜廻りが廻つて来るし、二時半には又その刻を打つ夜廻りが見える。三更四更とそれ／＼打ち方が違ふ。その鳴らしてゐる数がそれ／＼區別されてゐるのである。

その事を汪先生に訊いて見た。するとその説明は次のやうであつた。

二時には竹と銅鑼を打ち、二時半には専ら竹のみを叩く。さうして三時には銅鑼を三つ宛叩き四時には之を四つ宛叩く、これがこの村でのしきたりで泥棒の用心にやつてゐるのだと云つてゐた。ターカンテイ（打更的）と云ふは夜廻りのことで、その打ちかたを示してゐる所が面白い。村には又保安隊があり、水上署の公安局があり、巡官をよこして秩序を見張つて呉れてゐる。村は小さいところであるだけに氣持の和かなところが多く、夜の明けない前から安來節のやうな調子の長い唄をうたひながら、街を歩く者がある。随分朝は早くから稼ぎに出掛ける者が多い。この唄で夢を破らるゝのでそれがわかつたのである。

片田舎とは云へかゝる泥棒除けの組織があるについては可なり細心の注意の拂はれてゐることが察せらるゝ。これはこの蜀山の地が經濟的に重大な處となつてゐるばかりでなく、そこから西の方は溧陽に至る一帯の水郷が海賊の多く現れるところであるから村民の頭の強く刺戟されてゐることを物語つてゐる。

74 景德鎮と並ぶ鼎山の陶工

宜興の焼物と云へば、世間で知られてゐる通り海鼠焼である。これは昔から天下に名高いものである。そしてその本場の窯元はと云と宜興の鼎山にある。鼎山とはそこから一哩足らずの距離の所にあるが、ここでは陶工といふ陶工が悉く海鼠の製作に専門に従事してゐる。

中には三尺五尺といふ大きな甕を造つてゐる。睡蓮金魚の壺などには随分大きいものがある。又火鉢にも一號型、二號型、三號型と大中小各様のものがある。なほそれらの工場は可なり大規模のものである。その内部に這入つて見ると可なり採光の悪い暗い所で以て物靜かに陶工がこちらではたらいてゐる。

釉薬を掛けてゐるところに行つて見ると、薬は焼物の面は淡黄色に見えてゐるが藍色らしいところは見えてゐない。それが窯に入れられ、焼かれて見るとあの通り美事なナマコの模様を現はして來るのである。

日本の近江の名産、信樂焼は随分苦心慘澹な作物である。けれども、土も違ひ釉塗の性質も違つてゐる。その爲めにどうしてもうまく出會はない。根本は品物よりも人間の問題である。日本

人の藝術的氣分が、鑿劍使ひのやうに餘り固くなり闘志をはたらかし過ぎる所からゆとりある火鉢などの出来やう筈はないのである。要領は科學の力なんかにあらずして、むしろ氣分の問題にあるのである。

その工場は一方に出来上つた大小の陶器を山の如く積んでゐる。その外になほ出来損ひ、又壞れものなどをこれ又天に聳ゆるばかり高く山のやうに積んでゐる。

自分は工場の主人を尋ね挨拶をした。すると若い陶工をして陶土の出る山へと案内させる。その山は可なり奥深くトンネルになつて土を出してゐる。その内まで這入つて見せてくれる。これでレールまで敷いて、随分遠方から材料をとりよせてゐる事がわかつたのである。その規模の大きいことと云つたら恐らく日本の何處にも見られないであらう。

工場の視察をすませて自分は宜興の城内へと運河に依つて出掛けて見た。此處には有名な葛徳和の本店があり、又工場もある。こは上海の城内の葛徳盛と聯絡のある店で、その在庫品やら又その工場の盛んなることはたいしたものである。

此處は海鼠焼の方よりも、主に朱泥、白泥を取扱つてゐる。この店の内儀さんはなか／＼のやり手で境内に數多の陶工を統制し又客の持成ぶりなども手に入つたものである。かう云つた如才

のない女丈夫がゐるので宜興の焼物は一段と異彩を放つて行くものと思はれたのである。

宜興界限の焼物行脚は大體これで大要を察することが出来るであらうと思ふ。ところがこの汪先生は元來出が安徽の生れであつて、この地は旅の地である。それだから同郷の人がこゝには少ないと言つてゐた。しかし一人懇意にしてゐる同郷の友程先生（休寧の人）と云ふがあり、よく遊びに見えるので卓を圍み共に幾度か談笑を試みたこともあつた。

その時は次のやうな話を持出した。「貴國政府は中國政府に對して何を以て紛擾を惹起せしむることをするか。眞に互に親善を助長し東亞の平和を期待したいものである。先生以て如何となく。先生宜しく直書に依つて弊國の國情を宣傳し貴國の上下をして親善の益々必要なる所以を悟らしむるやう努力して貰ひたい」云々。など、氣焰をあげたことなどもあつた。

恐らくかう云つた氣持はあのあたり片田舎のインテリ階級は皆同感であるのである。時折り八釜しい事になると自分は文學談や文字の話などをして向ふの出ばなを挫き、こちらから軟らかく出て無抵抗主義を採つてゐたのであつた。

自分が客となつてゐた汪先生の家は「新振陶器所」と云へる看板を掲げてゐたゞけに地方のインテリ連中は割合によく足を向けてゐた。そして毎日のやうに來客の顔が代る／＼變るので興味

深く感じたのである。

中にも或る日のこと胡弓を弾きつゝ來たり遊ぶ者があり、小鳥を止まり木に止まらせて之を持つて來る者がある。何れも何とも云へぬ風韻を見せてゐた。

尙ほお隣の荒物屋の店頭を見ると日本製の更紗の反物が幾巻となく緞帳と一緒に戸棚に陳列されてゐるのが見えてゐた。又一方の棚には「味の素」の赤い罐、中鑑小鑑などの多數陳列されてゐるのを見た。鉛筆その他の文房具にも日本品らしきものが目にとまつたのである。

75 東玖湖停船の事故

宜興の城内は、中正街に中央黨部、省黨部、縣黨部並に區黨部、派出所（分隊）縣長など各方面の當局の名の下に物凄い揭示の出されてゐるのを見た。これらは皆城内でも役場と云つた格であつて、つまり南京政府に對して法律上楯つく者とか、又逆産を私する者とか、又地方の秩序を紊る者とか云ふものは宜しく之を打倒すべし、撲滅すべし、肅正すべし、削除すべしと云ふのである。又さう云つた言葉を用ひて激烈な口吻を漏らしてゐるものもある。かう云つた文學は地方民には耳にたこの出來る程聞かされてゐるので別に驚きもしない。けれども、劍付鐵砲の武装した

憲兵の前には之が薄氣味悪く映るのである。

中正街の葛德盛の焼物店には「燕賀佳賓」の四大文字を店頭に掲げ、如何にも文雅な氣持を示し、その同じ町内でありながら偉い峻嚴な文字の對照を此處に見出したのである。

溧陽に向つて輪船を走らせてゐると夕陽に照された邊りの水郷の眺めは、黄金色を漲らせて何とも言へない大きい又やさしい眺めであつた。

暮靄は低く垂れ、邊りは次第に暗黒の幕に鎖ざられるのである。まだ陽の入りの美しい一抹の雲が水平線に見え、船は東玖湖の中心に進みかゝつて居つた頃であつた。突然我が船は事故を起して立往生をするに至つたのである。

乗合の客は初めの中は存外皆香氣にしてゐたが、中にはヤン／＼言つてゐる者もあつた。自分は船員に靜かにそのわけを聞いて見たところが「機關がホワイラ（壊了）したので仕方がありません」と行つてゐた。「直す方法はあるのかね」と訊いたら「ないから困つてゐるんです」と言つてすましてゐるのであつた、實に香氣なものである。

支那の海賊船が、湖上に乗出して事故を起した時には、萬事策は盡きるのである。到底應急手當など出來つこない。又満員以上の客を乗せることは平氣で沈没の虞れは何時もある。それで平

氣でゐる。そこには船會社側が責任を持つことなど考へない。客をたくさん乗せれば請負仕事として儲かると考へる。たゞ儲かれば宜いといふだけで、噸數の事など眼中に置くわけもないのである。

船は停船する、機關の直しはととも見込がない、そうして乗組は手を束ね、たゞ暗夜の湖上、孤燈の下に手を拱いてゐるだけだ。では運命の開かるゝ見込が立たない。

けれども、何と云つても喧嘩にならないのである。たゞこのとき外部から来る助けでも期待する外に何等の方法は付かぬ。自分はその時、之を念じたところで仕方がないと思つたので、船中を賣り歩いてゐる物賣をつかまへ、少し餘計に買込んで置いたくらゐであつた。そうしてカンテラの明の下で繪入論語だの、千字本だのいふ卑近な冊子を繕き、邊りの乗合客の子供に讀み聞かせたりなどしてゐた。

これは特にその夜船に外國人の乗合客のゐることが知られると、若しやの變事を起した場合に面倒であり、更に事が悪く進展するかも知れないといふ點が懸念せられたためであつた。

それ故成るべく船内の雰圍氣に調和して、總體の保護色をそのまま多分に採入れて、そうして何處までも支那服、支那帽、支那靴、それで船中總べが支那の人といふ全體の統一ある氣分を環

さないやうに努めてゐたのである。

それ故論語を見てゐたのも子供を相手にしてゐたのもその邊の用意があつてのことである。日は既に西に落ち、東西南北闇の中に銷され、我が船の外に、夜の湖上は何物も認められなかつたのである。飛行機の爆彈投下でもある際にならばすべて火を消してしまふのである。

これが外來の敵に對する最も賢明な避難方法である。ところが本船はいくらカンテラの程度とは云へ、外部に光の漏れないやうな設備など出来てゐない。して見るとどうしても今夜のこの闇の湖上に事故の突破でもしたときは何としても、防禦の仕様がなないのである。かう云ふ薄氣味のわるい境遇に、而もこの海賊の出沒多い水郷にわが身はおかれたのである。

十六、海賊の去來か

76 海 賊 船 か

東玖湖の水郷には、先刻まだ明るいうちに自分は大砲を装置した官船の姿を認めたのであつた別段乗客をつかまへこの事について言葉を掛けて見ることはしなかつた。けれども、自分は密かに心の中で成程そろそろ海賊の本場に近付きつゝあるのだから、あゝ云つた砲船を用意されてゐるものかなど官邊側の苦心の存する所を考へて見たりなどした。

もとより支那の大砲のことであるから、どれだけの効力があるのかは分らない。けれども効力の有る無しは問題でなく、かうして砲筒を向けて湖上に威嚇を示して居らなければこの湖上の秩序安寧が保たれないといふことを知るにはあれで十分である。

事實これは睨みを利かせるだけの効力を發揮してゐるのであるが、何にしても湖水のたゞ中で斯うした停船の事故を起したといふことは運命として諦むるの外ない。船室の奥まつた所にかた

まつてゐた身なりのいゝ船客共は、しきりと聲を勵まし、船員を叱り飛ばしてゐる。けれども船長、機關長は共にたゞ叱られるがまゝにしてゐて一言一句をも發しないのである。

そうして時折り汽笛をブー／＼鳴らしてゐる。我が船は「建元號」と云へる汽輪で、朝の七時に無錫を出帆し、合計二百四十支里の水郷を航行して今夜は溧陽に着く豫定になつてゐる。

元來が定期船であるからこの時刻にこの地點で汽笛をあげれば、この船の所在はどここのあたりであるか、頭のある者には解つてゐる。けれども別段警笛として聞こえる鳴らし方をするでもなく、たゞ呑氣な普通のブー／＼を發して居るだけである。

かう云つた事がいかにも間が抜けたやうに感ぜられた。けれども餘計な事を言ふわけにも行かない。船内はさわめく。流石に呑氣を決め込んでゐた乗客共もだん／＼堪らなくなつた者が見えて、船は何時迄も斯うしてゐるのかなどと云つて嚴談してゐる者もある。たゞをとなくしてゐるのは女子供たちと自分だけであつた。

ものゝ二時間ばかりは、斯う云つた不安の状態が船内に漲つてゐたのであるが、やがて幽かな彼方の水上に見えるか見えなにかの處に火が一つ認められた。

けれども之に向つて進まんとしても舵が利かない。それで續け様にたゞ汽笛を鳴らしその哀れ

みを乞うて居つただけのことであつた。だん／＼するうちに、どう感じたものかそれがこちらに向つて來るのである。

若しその船がたゞの船でなく海賊船であつたとしたならば、得たりかしこしと本船を餌と見て近付いて來たであらう。まさかこちらの船が海賊船であつて自ら汽笛をあげたりするわけはないかう云つた事を内心密かに考へてゐると、實際のところは場所が場所だけに、どういふ事態になるか分らないと云ふ氣もちがする。その湖上遙かに見える火の、近付けば近付くほどその點について心配が募るわけである。しかし遂にだん／＼と近付いて來ると我が船の左舷に近く碇をおろした。

見るとその船は餘り大きい船ではなかつたが、曳船であつたと見えて一隻の船を曳いてゐるのである。やがて見るうちに、その曳かれてゐた民船の客を親船の方に移して引とつた。そうして本船との話が交はされてゐたが話はうまく成立つたものと見え、艦綱で以て我が船は結び付けられた。よくもあの通り暗いところを結びつけるものである。そこまで引張つて來た船は客を引とつたのでそこへ置き去りにして、我が船をその代りに曳いて西の方、湖口から運河に這入つた。やつとこれで以て自分ども停船に惱んだ航路はどうか光明を見出すことが出來たのであつた。

77 夜の溧陽支那宿に辿りつくまで

我が輪船「建元號」は闇みの運河を辿り辿つて西の方燈火きらめく水郷の方へと進む次第に吸ひつけられるが如く引張られて行く。これが夜の溧陽である。やがて右岸の意外にも賑かな碼頭に着けられた。

その時は晩の九時過ぎ、彼れ是れ十時近くであつた。岸の方から三間に餘る厚い板が船へと渡される。出迎への人は多い。暗みの船着のことゝて事の外騒ぎが大きいのである。どうしてこんなに遅れたのであらうなど知らない陸の方では噂さとり／＼であつた。

宿のしるしの這入つた提燈を高く翳して碼頭近くに詰寄つてゐる者がどつさりある。そして客を呼ぶ聲は耳を聳せんばかりである。どの人もどの人も大聲を立てゝゐるので、殆んど何が何だか一寸も聽取れない。

豫て溧陽ではターホワ（大華）と云へるカザン（客棧）が一等良い旅館であると聞いてゐた。闇の船着は見たところこれが海賊村の碼頭であるといふ感じなどしないくらゐに賑かである。その騒ぎが餘りに大きいので暫らく自分は上陸を待ち急がない。最後まで船にゆつくりしてゐた。

すると危ない板上を一人一人手廻りの荷物を提げあがるのである。だからその危険なことと云つたら言ふまでもない。中には出迎への者が先を争ひ板を渡つて這入らうとする。そこへさして船の方から出て行かうとする。渡せる板は狭い。摺れ違ひに渡ることはとても出来ないのである。その點では危険の上もない橋板と言はざるを得ない。

しかし最後まで待つてゐると人も少なくなりどうにか渡れるやうになり、又碼頭も静かになつた。そこで自分は一人悠々とわたつたのである。ところがその代りそこには一向出迎へに來た宿の男達も残つてゐない。宿引きは一人もゐない。ゐなくても何とかなるだらうと自分は闇みの路を行く人についてあるき之を尋ねて路を左へ左へと取つて行く。

そして遂に豫定のターホワフアンテン（大華飯店）に辿り着いたのである。處がこは實に支那の奥地には似合はしくなくくらゐの大規模の支那宿である。之に入り休む。きいて見ると部屋数は六十有餘もあるといふことである。えらい宿である。昔この溧陽と云ふところは安徽と江蘇の交通の衝に當り、又水陸兩方面の咽喉を扼してゐる重要な位置にある。そのため斯う云つた大きな支那宿もおのづから出來たわけであると思はれた。

流石に此處はむかし海賊の本場だと謂はれてゐただけに、何となく街には底力があるやうに見えた。

78 宿帳は支那名にて

ターホワフアンテン（大華飯店）の店構へは西洋館に近い支那式の堂々たる建築であつた。三層樓の高い建物であつた。わけても店の入口は廣々と出來てゐて、向つて右側に大きな受付と帳場を兼ねた事務室が取られ、その左の方から正面一帯にかけては廣びろとした客室がどつさり取られてゐる。その卓や椅子は紫檀の見事なものばかりであり、正面の壁には姿見のゆたかな立派なのが掛けられてゐる。そしてその左右に次のやうな聯句が讀まれた。

下榻宜留三哲士

授餐每款三高士

又その筆蹟がまことに立派であつた。卓上の大花瓶には花が生けられてゐるし、又壁には黒塗りの大の掲示板があつて之に止宿者の姓名、郷里、職業などが書き連ねられてゐる。而かも半分以上部屋は塞さがつてゐるのである。

どう見ても堂々たる盛んな客棧であつた。正面大鏡の右手には、米國のグララインの三萬噸

の汽船の油繪が金の重々しい額縁に入れられて輝いてゐる。アメリカの大船が斯う云つた片田舎にまで廣告に出されてゐるとは、實に努めたりと言ふべきである。日本の郵船や商船などは一體何をして居るのであらう。

支那は幾ら奥地の片田舎であるからと云つて、之を見限つてしまふわけには行かない。馬鹿にならぬ。又幾ら泥棒の本場だからと云つて、何時迄もさう云つた噂にのみ囚はれて恐れたり、棄てゝおいたりすべきものではない。

何でもよい。そこまで兎に角自ら自分で這入つて見なければならぬ。どんなところでも跋涉をして見て初めてその眞價を突止めることが出来るのである。

自分は着いたばかりであつたからこの宿の應接間にて暫し憩ひ、姿見の前で徐ろに額の文字や聯の句など味つてゐた。すると番頭が茶を持って來させてさうして言ふことには「先生はお止まりになるんですか」自分はそのとき急いで返事もしないやうにしてゐた。そして云つた。「さうです止まるつもりです」と。たいしてこちらから、あまり取合はないやうにして静かな態度でゐた。すると又熱茶を入れて「どちらからですか？」と言ふ。とぼけてこちらは黙つてゐた。止まる以上はこちらはお客であるし、處は何處から來たにしろ問題ではないと考へてゐた。すると向ふ

から「先生は廣東からですか」と言ふから「さうです廣東來的」と答へたのみであと餘り言はないやうにしてゐた。

やがてするうち又熱茶を入れるのである。こんどはそろ／＼自分の方から口を切つて次のやうなことを尋ねた。

「奥まつた部屋で静かな處があるなれば成るだけ隣室にお客さんのあるやうな部屋を選びたいもの」だと言つた。すると「幾らも部屋があります」と云つて自分を案内し奥の庭に面した三階の見晴しの佳い處へ連れて行つた。

見ると部屋は小薩張りしてゐるし、價も餘り高くないし、寢臺の外に腰掛が二脚、八仙卓が一つ、洗面器、鏡、便器、これだけある。よろしいと取りきめ、そして早速顔を洗ふ熱湯を持つて來させる。又お茶を入れさせる、そのうちに第一は宿帳を持參する。然るべく筆をおろして「藤石農」出身は「廣東」職業は「教師」と書いた。

でも番頭は何とも思つてゐない。又その筈だ。純粹に廣東から來たお客と思つてゐるのであるから細かい事は何も聞かない。そして自分はボーイにこの附近にある茶館を訊いた。さうして教へらるゝがまゝに外へ出掛けて行つたのである。

溧陽には音にきく聽松亭の庭園であるとか、或は孔子廟であるとか見るべき名勝古蹟も色々あり、又市中には他に相當な旅館だの、呉服店、雜貨店、寫眞館、書籍屋なども可なりあつた。夜遅くまで自分はひとりで賑かな市況を見て廻つた。すると街の要所々々には劍附鐵砲の兵隊が數多警備に住じてゐるのを見た。

溧陽の地は昔から江蘇安徽の交通の要路に當り、金を持つてゐる商人や又金目な荷物の動きが頻々に活潑に行はれてゐるところである。又水運の便を利用して、怪しい人間の出没も頻々あつた處である。それが一と稼ぎすると、或は東の方太湖の方に逃げ、或は又西して身を安徽の省界に晦ますなど、最もその方面のやり手には屈竟の場所として見られてゐたところらしい。

この地にこれだけの大規模の旅館のあるといふことは、如何に金廻りのよくて又商賣の活潑であるかといふことを思はせてゐる。従つてあのアメリカの汽船會社がプレシデント型の華麗な船の油繪まで斯う云つた奥地の宿に掛けてゐる。これなどは如何にもその經濟的に重要性を持つてゐるかを示してゐるものと思はれる。一面に海賊の本場で名が通つてゐることは云ふまでもない事であるけれども、他の半面には如何に底力のある船着であるかと察せられる、太湖以西に最も樞要な商榮市場をなしてゐる處であるといふことが出来るのである。

79 金壇の水郷に向ふ孤舟

江蘇の北部は、金壇の水郷又高郵の水城を初め、この地方には説文音韻學の専門學者を出してゐる。殊に金壇は説文解字の註釋を作つたので有名な段玉裁を出してゐる。段玉裁は清朝の小學研究の權威である。

豫てこの金壇の名は特にその點で自分は懐かし味を有してゐた。又山東曲阜孔子廟の中にも、段玉裁は配祀せられてゐる數の中に加へられてゐる。旁々以てこの水郷巡りにこれに向つて道をとるべく計劃を立てた次第であつた。

溧陽から奥地は、これ迄の太湖の水郷とか又運河の水郷とかのやうに水が多くないので航行が自由でない。奥地は次第に田畑も高くなり高原地帯とか臺地とか云つたものになつてゐるらしく見える。

併し溧陽は四通八達の處で之を中心として東西南北に運河が開鑿せられてゐる。又附近の大小幾多の湖水が取り入れられ之に澤山の運河の水路が設けられてゐる。従つてその周圍から集つて來る民船、一錢蒸汽、帆船などが西門の碼頭に、殆んど舷々相摩し

て礎をおろし、その盛んな景況と云つたら迎も想像も及ばないくらいである。朝は未明から汽笛をあげて、客を呼んでゐるといふ状態である。宿で部屋にゆつくり夢を結んでゐても、頻りに目を覚ませるくらの八釜しく響が聞えてゐる。

この地は田舎支那街のことゝて、幾らその商賣が盛んであり、市況が活潑のやうに見えてはゐても、道幅は例によつて相變らず狭い。やつと腕車が二臺摺れ違ひになるだけのゆとりしかないさうして路面は二列にあらんだ黒い敷石で舗装せられてゐるが、歩行にはかなりきこちない感じがする。この街はあちらこちらにしきりと武装兵が見張つてゐるので、他の地方よりも警備を要するわけがある處のやうに見られたのであつた。

街はその青天白日旗が軒並み高く懸され、又青いペンキ塗りの壁に青天白日の模様を描かれたのが見える。こは近代式の氣持を漲らせてゐる譯である。碼頭に見る售票處（切符發賣所）は簡單な交番のやうな小さい建物であつたが、朝早くから入變り立變り切符を求めに来る客は引きりなしにある。

その切符賣りの事務振りはきびくしたところを見せてゐた。客は大抵十錢二十錢の小銀貨かさもなば銅錢を出してゐる。札びらを切つてゐる者なんかは殆んどゐない。ところがそこへ立

派な堂々たる髭のある紳士がやつて来て切符を求めぬ。

見ると、ポケットに手を入れたかと思ふとききなり五圓札を出して釣を取つてゐる。これが若し日本人であると先づ發賣所の前でポケットから財布蓋口を持出すのが順序である。さうしてその中から一枚抜取り之を差出すのが普通である。

ところがさう云つた間の抜けた事は支那ではやらない。何れの港にも、何れの商店街にも之を見ないのである。つまり手許に持合せの金のあることはおくびにも出さない。内隠しには小銀貨を入るゝ場所、札を入るゝ場所、銅幣を入るゝところ、それゝその所を違へてゐるのである。

だから、ポケットに手を突込んだときは手さぐりで以つてその見當を付け取出して來るのである。この邊のことについての注意深くやる習慣と云ふものは無意識的にさうやれるやうになつてゐるのである。それだから日本人などで支那内地を旅行する者にはこれが最も奇異に感ぜられる所である。

その紳士は切符を求めてあとどうするかと見てゐると碼頭水邊の露店で支那そばを求め立食ひしてゐるのである。出帆間際のこととて時間のなかつた爲めでもあらうが、かう云つた無雑作な光景はあちらでは常に隨處に見受けるのである。

自分が時間の都合で自分が勝手に自分の金で食ふのであるから何等人からの見てくれ世間體だの人に對する氣兼ねだの云ふものの要るわけはないと考へてゐる。その邊の氣持は力強い。いつの瞬間にもそれは現はれてゐる。食べてすめばポケットへ手を突込み相當見當をつけて銅錢をあるだけ掴み出し、勢ひよく眞一文字に臺の上に投げ出す。そこいらあたりの手際は實に冴えたものである。

これは不斷麻雀をやりつけてゐるのでその手つき銅幣の數の見當を付けるところなどは實に驚くばかり鮮かなものである。

溧陽の碼頭は盛なところである。その岸に着いてゐる一錢蒸汽の數はたいしたものである。ぎつしりと詰つてゐて動かないので、何れがどこ行きの船であるか、薩張り判らない。旗一つ立てられてゐるのでなし、船に行つて一々青竹を差してゐる船頭について聞いて見なければ判らないのである。

自分は金壇行きの船をさがしてゐるにその第一線の中には見當らない。ふねは舷舷相摩してゐる。船の上を通り越し三つも、四つも渡つて行つた先の船がやつとそれだといふのである。船の上を横切り渡つて行くには誰れの船であらうが、どちらのハウス・ポートであらうが、心配はい

らぬ。大荷物を抱へて構はずどんどん人の船を横切り上を通つてゐる客がたくさんある。

かういふことは通る人も當然の通り道だと心得てゐるし、通られる船の方でも、厭やな顔なんか少しもしない。お互さまであるからといふ氣持なんであらう。

田舎街とは云へ、この碼頭の船の多いのには實に驚いたのみならず、あちらこちらから汽笛をパイ／＼鳴らしてゐるその騒がしさと云つたらない。又各船の舷を物賣りが支那靴でかるくある。その呼聲の騒がしさと云つたら又とない。その空氣は朗かである。

水上の先の方は朝の靄に包まれ雲煙模糊として見えないのである。けれどもやはりその雲霧の間にとことなく賣聲の響が聞えてゐるのは詩のやうである。

やがてやつとのこと、金壇行きの船に乗込んで見た。すると、内部には等級がなく、仕切りもない一律にすべてが追ひ込みの客艙である。皆三寸くらゐの青切符を持つて乗込んでゐる。殆んど船内は一室であるが客のために四列に席が設けられてゐる。その席は厚板を渡してあるだけで之に座を占めるのである。

その日は可なり満員の状態で、客は腕と腕とぎつしり接し合ふ位に込み合つてゐる。その客だねはと云ふと、百姓、商人、兵隊、村夫子、子供と云つた手合であるが、何れも乗り込んでから

よくしやべつてゐるが地方語の發音で話して居る者のみである。そしてその客には都人士淑女らしき者は一人も見ない。

物賣りは異様なアクセントを有する賣り聲で、箆を肩にし舷やら座席の間の通りみちやらを押分けひしわけ頻りと愛嬌を振撒きつゝ行つたり來たりしてゐる。

白米を搗いて作つた炒餅、黒褐色の四角の乾豆腐、又鹽蛋（ゆで卵）長生果（落果生）その他この地方の駄菓子類などを出帆前のことゝてあちらからもこちらからもと賣りに來るのである。件の紳士君も乗合はせてゐたが、暇さへあれば尙ほ心ありげに賣子の箆まで覗込み何か知らん二つ三つ摘み求めてゐた。そこらあたりの様子と云つたらまことに子供のやうで罪がない。天真爛漫のところが見えてゐたのである。

併しその紳士君ひとりではない。かうした船の中と云ふものは純朴な田舎びとのみである。假令兵隊にしたところでさうその別段物凄顔付はしてゐないのである。

兵隊は自分達の筋向ひの處に席を占めてゐたが、隣席の人と頻りに心やすげな話を取交はしてゐた。出帆してから後も、絶えず話の中心となり、何等兵隊らしきいかめしい所は見せてゐなかつた。若しこのあたりの事情に慣れない日本人が始めてこゝを歩いたのであると迎も大變である

かう云つた船は薄氣味が悪くて仕方がないと感ずるであらう。

けれども、それは變な先入主があつてそれに囚はれてゐるわけであらうと思ふ。世人も知る如く、むかしからこゝは場所が海賊村であり、その乗合せた客も怪しげな人ばかりであると始めから決てかゝつてゐる人が多い。かゝる人なら旅行の前途はいつも案ぜらて仕方がない事であらう。わけても夜に入り、闇みの中に見ず知らずの客と碼頭にあがるなど思ひもよらぬことである。けれども自分は全く日本から來たひとりぼちの孤客であるが旅枕の夢は悪くない日本の片田舎を行く旅心地に比べ何等變る所がないのである。瀋陽金壇間の船賃は、たしか太洋六角（六十錢）であつたが、これはこの航路の終點まで乗るとしての船賃であつた。

船出間際に不圖氣が付いて見ると、船の板壁に持つて行つて一枚の揭示が貼付けられてゐる。そは云ふまでもなく、公安局長の名に於て次のやうなことをむづかしい漢文で記してゐる。曰くこの地方界限は土匪海賊の恐れがある。殊に近來は頻々その害を被る者が多く、市民や村民で之に惱んでゐることは一と通りでない。若しそんなこともあるまいと思ふがこの地方の住民にして萬一匪賊を隠匿する事實の見付かるやうな場合でもあつたならば之を嚴罰に處することあるべし云々。と公示されてゐるのである。

又船では係の方からこの事についてさきに一應の注意があつた。この文字を文面の上から見ると如何にも縮み上るやうな風に感ぜられたのである。然しそこは、ピストルを帯びてわが船に乗込んでゐた兵隊の様子から見ても別段何こともなかつた。

乗合客の全部と云ふものは極めて平和な純朴な氣持を漂はせて居る。従つて全然異分子の形に加つてゐる日本人としての自分たちにしても、その間、何等不安だの恐れだのいふものはなかつた。のみならず中には随分滑稽家がまじつてゐて、絶えず邊りの内儀さんを笑はして見たり、自分どもの如きよく言葉の解らない者に對してもそのゼスチュアで以て吹出させるやうな事をした。又近所の子供をからかひお菓子を取上げて見たり、又それを後ろへ隠して見たり、泣かせたり、笑せて見たりなどして罪なき悪戯で以て船内は頗る陽氣な雰圍氣を漲せてゐたのであつた。溧陽から金壇に行くまでの水郷は、これまで見た水郷の如く水量が豊かに湛へられてゐるといふのではなかつた。兩岸は桑田のみ運河は幅四五間、廣いところで十間位な水路であつた。溧陽から金壇までは約六十支里と云はれてゐる。岸には餘り護岸工事など施されてゐる處はなく、自然土のまゝの土手をなせるところで之に綠草が芽を出してゐるといふ和やかな眺めなのである。溧陽金壇間は南から北に通じてゐる水郷であるがその船着は何れも田舎らしい趣を見せてゐる。全

くの農村風景を漲らせてゐる處なのである。即ち、

1. 溧陽
2. 道人橋
3. 甕橋
4. 指前標（一名「紙錢票」とも書く）
5. 王母觀
6. 古龍山（廢塔あり）
7. 金壇

である。

過ぎ行く水郷碼頭の名前は其の青竹を棹す船頭の發音振りを聞いてゐると異様に感ぜられる。別段其處には各碼頭の名を知らせる石標立札などの立てられてゐるものでもなく、たゞその碼頭につくと大きな叫聲で「タオニンチャオ、タオニンチャオ（道人橋、道人橋）」と繰返されてゐるだけである。

その字が如何なる文字であるかは薩張り判らない。又「ペーチャオ」と言つたり「ツウチエンピヤオ」などいふ呼聲が先の方に行くとき聞える。船頭に訊いて見てもその字は判らない。兵隊に訊いて見ても無論判らない。側の鼈甲ぶちの眼鏡の客に訊いて見ると、やつとわかる。そは「甕橋」とか「紙錢票」とか云ふにあたる。何だかあとのが變に感ぜられたので、又村夫子らしき人に訊いて見る。するとこんどは少しく字がちがひ「指前標」だと教へる。

二者何れが本當であるのか即席では自分によく解らない。だからと云つて携帯してゐる地圖な

どを持出すわけにもいかぬ。悪くするとそれからして自分の身が注目の的となり、あとで陸にあがる時にきつと問題を起す。

起すのは却つて面白くて望む所であるとも思はるゝけれどもそれが爲めにきつと時間を取られたり、豫定の行動が出来なくなつたりなどする。そこで少々不満足でもたゞ聞いたまゝを頭に收めて置くだけにするやうになる。

船内では稍々事の解つた客を掴まへ自分は次の事を質問して見た。「溧陽の水域には商賣は何を以て最も盛んなものとしておますか」と訊くと、その答は「米と鶏卵が今日この地の特産品でその集る量は大変なものである。又店としては兩替屋、又菜館、客棧の有名なのが少なくありません。」など言つてゐた。

船内の客を見てゐると、そこにはステツキかと思はるゝくらい長い竹を手にしてゐる老人がある。見ると時折り口元のところに持つて來るのである。成る程こは煙管であるかといふことが判つたのである。その雁首と云つたら腰を掛けてゐて足許の靴の所にまでも達してゐる。灰を捨てる時には靴の先にコツン／＼叩いてゐるのである。

又岸邊には處々、地方々々の土饅頭の續く墓地が見える。その墓の頂にはそれ／＼楔形に造つ

た土塊を逆まに置き、之に白紙を挟んで風に翻してゐる所が多かつた。かう云ふ風俗によつてこの地方の風物がひどくやさしく眺められた。

丁度清明節のお彼岸時分であつた。かう云つた年中行事があちこちに見えてゐるのである。

又、この春さきに百姓の運河に出て船の上で働いてゐる者を見ると多くは竹の先に箆を付け川床の泥をすくひ上げすくひあげ取つて居るのである。これはホニタン（河汜湛）と云ひ、この地方の桑田或は菜種畑にばらまく肥料にするものだと老農は説明して呉れた。

王母觀の村を横切る時に水邊に白壁の美しい小學校が見えてゐた。金壇縣王母小學校の看板がそこに見えてゐて、先生らしきが門のところを姿を見せてゐた。

こゝを過ぎるとまもなく廣き湖水に出る。その先に青空に高く聳ゆる廢塔がある。その水に倒影を投げてゐるところは水彩画そつくりである。廢寺の傍に寺僧が四五人働いてゐるところも見えてゐた。それから先の方に行くと次第に水路が狭まり、桑田はそろ／＼臺地の如く高くなり、彼方の右手に民屋の打續いた處が遙かに指さされるのである。船頭は大きな聲して金壇に着きましたと言ひ客に上陸の支度をさせる注意を促してゐたのであつた。

80 城内文化の色

船は金壇の水門を潜り城内の碼頭に着く。數杯の民船が泊してゐるところを見たが、まことに淋れ切つた水郷である。民家は古いのが多くそれに仰がる、壁も荒廢してゐるものが多かつた。民船が棹す青竹は綠色も濃く、なまめかしく見えてゐる。けれども、邊りの景色は如何にも力のないこと夥しく、取残された街のやうである。溧陽に見たやうな街の活氣ぶりは此處では殆んど窺ふことが出来ない。

同じく運河水郷の西端にある支那街であるとは云へ金壇の方は斯くも淋れきつた田舎街であるかといふ感じがしたのであつた。

惟ふにかう云つた金壇の第一印象はたゞ碼頭にいたばかりであるがこれが總べての事を物語つてゐる。もはや金壇にはこれを中心として溧陽に通ずる水路以外他に水運の便としては有してゐないのである。

然し自分は思ひ出深きこの街に少なからぬ懐かしみを持つて上陸した。段玉裁先生の故里でもあり、又城隍廟を始め、田舎街に相應しい面目を有してゐる處であらうとも思はれたのであつた。

自分は取敢へず邊りを歩いて見た。市況は案の條居眠れるが如く何等の力と云ふものを見せて居らない。民家の軒には、

恩光北出

紫氣東來

などいふ聯の句が見えたり、又軒に横書きしてあるものには、

姜太公在此

百無禁忌

など云へる呪の言葉を見た。姜太公とは周代の太公望を意味したものであるさうで、俗間に於て泥棒除けの呪ひになる言葉とされてゐるのである。

家には姜太公をさへ祀つて置くならば悪魔は這入つて來ないと云つてゐる。暗に海賊土匪の泥棒除けの目的で神經質に之を掲げてゐることが必要であるとなしてゐるのである。

城内をあるいて見ると國民政府教育館など云へる門票の掛かつた寺が見あつたが、内部を窺つて見ると何もなく、至つて淋しい。たゞ門に青天白日旗が掲げられてゐると、内に卓と腰掛と係員の二三人がゐると云ふだけのことであつた。

城内路上に敷きつめられた石は何れも平坦ならずして頗るぎこちない感じがする。すべて路面の善悪で大抵その街の文化の程度が卜せられるものであるが、全くこの街は経済的にも殆んど問題にならない處だと感ぜられたのであつた。

碼頭近くの公館に立寄り、自分のプログラムは丹陽に出るに在る。そこまで六十支里の道を行くに成るべく水路に依りたいといふは考でゐた。そこで老爺に相談を掛けて見た。するとその運河は此の金壇が終點である。これから先は丹陽に行かうが又鎮江、南京何れに行かうが、最早や水路はない、東北常州に向かふ水路ばかりは舟行が出来てゐたが、これも近年水が思はしく無いので不可能になつてゐる云々。

して見ると舟行は全く見込のないことに斷定を下されたのであつた。自分は少々遠廻りはしても船に依りたい希望であつたのだ。けれども、遂に押問答の結果已むなく手押しセウツカの小車に依つて丹陽都城まで北行することゝなした。そして推車の公司に行つて老爺に交渉し、その用意をさせたのであつた。話がきまつたので自分は茶館に入り食事を攝つた。さうしてゐる間に丹陽行きタンヤンの小車の支度をさせたのであつた。

十七、田舎街の暗路

81 蔣介石の軍用路か

金壇の田舎街を城外に出で小車セウツカに乗り北方に路を取つて、雲雀鳴く朗かな佳節に當り自分は丹陽として立つた。長い間、運河に又湖水にと水の旅を續けて來たのであつたが之からは陸行だ。南支では所謂江湖の諸君など謂はれるくらゐに總べて天地は水の世界を成し、江流に非ざれば湖沼である。その江湖の間をのみあるいて來たのであるが、さう云つた處から初めてこゝに水と縁のない陸を進むことゝなつたのだ。

城外の綠野に出て見ると右手の空には金壇縣の白塔が高く聳えてゐる。その輪廓が青空にくつきりと仰ぎ見られたり、又處々に國民黨、黨部農會の事務所などが路傍に指さゝれたり、そこには田舎ながらに幾分近代文明の氣持の見えるところがあつた。

電線は南から北へと通つてゐるが、線は僅かに二筋である。恐らくこれは溧陽、金壇、丹陽、

鎮江と行つてゐるものであらう。

丁度折よくもこの陸行に移つた日は四月十六日であつた。氣がついて見ると自分の五十一の誕生日に該當して居つた。空に轉る雲雀の音も、又畑の畦に河泥を運ぶ百姓の鄙唄も、或は人足たちの土を運ぶ足並に揃へて出る拍子の聲も皆すべて一種の音楽の如くに感ぜられた。

茶種咲く野邊の彼方は、春霞棚引き、和風緑野を吹いて清雲朱絃に入ると云つた古人の句など思ひ出づる。天地はボカボカ暖く、何とも言へない自分にとつては平和な氣持であつた。

最早やこの邊りは海賊村の噂だになく、我が身を乗せて押してゐる車夫は、先に金壇の碼頭で交渉した老爺の息子である。

自分が金壇の飯館で食事を攝つてゐる時に老爺は「小車にはわしの息子をつけませう。體が屈強であり、それに道に明るいから、私の代りとしたつけませう。御安心あれ」と言つた。そして車賃二弗五十仙の中、二弗を前拂ひで支拂つて置いて呉れと云つて親父はそのかねをとり、あとはむすこに稼がせることになつたわけである。そして自分はむすこが親父から其の中の一弗を手渡して貰つてゐたところまで見てゐたのであつた。

なるほどむすこの車夫は筋骨が逞しく、兩腕には筋肉のむら／＼と盛上つてゐる所も見えてゐ

た。その話をするときの聲が又ばかに高い。千里の野の彼方までも聞えるくらゐな返事ぶりである。珍らしい素朴な面白い田舎の男に見えてゐた。

時折り求めないのに勇ましい話題など持出すし、金壇の白塔の方を顧みては、この地方の廢寺の珍談などして呉れたり、又王母觀だの古龍塔の話などもして呉れたりした。こんな風で四方山話をしつゝ小車で以て、自分は春の野のボカ／＼する田舎路を北行するのである。すると田園の間にこれは又物凄く廣くとられた新しい道路にさしかゝつたのである。

金壇から丹陽に通ずる所は近代にない大仕掛けな道路である。まだ工事を始めて間もないところのやうであつた。その幅も二十間ばかりあつたかと思はれる。この豫定線としてきめたところは茶種畑であらうと、桑畑であらうと構はず開鑿して作つてゐる。そして路傍に溝を造り、畑と道路の境目を眞一文字に見渡す限りかつきりと造つてゐる。その境には電柱が立てられてゐるので、先の方は電柱が小さく見え始んど霞に間遠ふくらんであつた。

その路面は中央のところ泥田の體裁そのまゝで、これに草ぼう／＼。首もとの白い鶺鴒などがこれにおりて来て啄いてゐるといふ有様であつた。が兩端に近い處は稍々水牛や人間の去來があるのでいくらか固まつてゐた。丹陽に行くにはしばしこの新道を辿り辿つて陸行するのである。

路上滅多に百姓に出會はすこともなく、犬一匹出會はすことがないのである。時たまキイ／＼
音の軋る推車に出つくわすことがあると、その車夫はたがひに仲間同士であると見えて、何か大
きな話聲で二言三言喋つてゐるのである。

路傍の春色は、如何にも朗かであり、氣温は益々昇つて来る。だん／＼行くうちにボカボカど
ころか、初夏の氣温を感じて来たくらゐあつく、多少汗ばむ氣持さへした。

大陸の春は短かく、春になつたかと思ふと實は直ぐ夏に變つてしまふ。冬から夏に一足飛びに
行く。その中間は僅か二、三週間もないくらいである。江蘇に見る四月の中旬は確かに初夏の
緒に入る門となつてゐるわけである。

行くこと暫らく、車夫はそのからだににじみ出る汗に耐えずして、水流のあるところに来ると
わざ／＼車を止め、水邊に下り鬼のやうな兩手して水を掬ふのである。見るとがぶ／＼幾らでも
生ま水を飲んでゐる。泥河の濁流であつたけれども、少しもお構ひないものらしい。

由來支那では幾ら下等社會でも生ま水を飲むことはなく、熱湯を飲むことになつてゐるが故に
おのづから衛生に適つてゐるといふことを多くの支那研究者は述べてゐる。けれども自分は此處
に現實にこの通りさうでない場面を見せ付けられてゐるのである。

支那の事は總べてこのやうなわけで原則を以て斷定したり押し通したりすることは出来ぬ。瞬間
々々の事柄又その場面々々の現はれによつて常にそこに變つた例外を見ることが幾らでも續出す
るのである。労働者、苦力階級のもが生ま水を飲む事實などは、例外の方かも知れないが、普
通人の注意しない方面のことである。此處に曝け出されたのはその一
例に過ぎぬと見るべきであらう。

こゝに自分の進みつゝある道はどう云ふ道であるか。察するにこれは水郷としての金壇の街から
丹陽、鎮江へそれからさきは南京の方へと通ずる立派な軍用公路なのであらう。蔣介石の手に依
つて作られた南京政府の所謂官用線なのであらう。隨つてその計畫のいかにも大袈裟であること
ろは見ものである。殆んどその田園であらうが水流であらうが、少しも頓着なくその最短距離を
取つて平野を縦断し着々開墾されてゐるのである。

或る處に來ると、既に立派な石垣の護岸工事が出來てゐたり、又鐵橋を架するべく數多の苦力
や技師などが群がり工作に従事してゐたりした處もあつた。三間五間と大きな厚板を之に渡して
十數間の脚下に濁水の流れてゐる處を渡つたりしたこともあつた。

我が車は小車のことゝて、輪が一つしかない。之に座布團が置かれてそれに自分が腰をおろし

て居るのである。しかるにその水流の上に渡せる板の端と云ふは僅か二尺足らずである。逆も自分で渡るには氣持が悪い。小車から降りて恐る／＼自分は先に之を渡つた。すると車夫は大膽にも平氣で當り前の歩き振りで以て之を渡つてしまつたのである。如何に慣れてゐる車夫だとは云へ實によくこなしきつてゐるものである。

南支の田舎は、單り此處ばかりでなく、上海から浙江の田舎、錢塘江方面に向つても、西興、紹興、曹娥間の如く立派な軍用道路の出來てゐるところがある。又浙江の寧波南門外から蔣介石の郷里、奉化へ向つて見てもそこには文化式の鋪裝道路が立派に出來てゐる。その幅が五六間もある。これらのうちわけても自分のいつも通つてゐる、錢塘江から紹興曹娥に到る自動車道の如きはアスファルトで鋪裝はしてゐないが立派なものである。

かう云つた最新式の道路は更に時折り米支の借款の問題が起る度に米國から新道開鑿の條件が提出されてゐるとの流説がある。

上海漢口間の六百哩の江岸の如きも、之をアメリカ人が一手に引受けて、この借疑の交換問題にフォードの自動車を用ひしめる等、可なり虫の好い話も持上つてゐる。最近茲五六年の事であるが、あの財政窮乏の中に兎にも角にも現實に、又遺線算段の噂の中にかうした交通路の目覺し

い、發達をあらにもこちらにも見せてゐることは、アメリカの航空路援助の事實と並べ考へて頗る注目に價するものがあるのである。この點は特に支那文化を窺ふもの又支那の軍事に興をもつもの注目に價するものであると思ふのである

82 珥陵小車の乗客轉賣

自分ばかりの如くして軍用自動車の完成途上にある路面を謳歌しつつ、雲雀泣く音を樂しみながら、春風に吹かれ小車を頼りに北行し進んでゐたのである。すると何時しか道はこの軍用路から離れて右手の畦路を辿ることになつた。

これからは水郷といふ程のものとはないけれども、土手の下は運河の小規模のものが見えてゐる。水は濁れ處々に竹の筏や小舟のそのまゝ停頓してゐる處が見える。流すことも出來ず困つた姿で行惱んでゐるのである。

やがて二三の農村を過ぎ行くと、丁度金壇丹陽間の六十支里の約半分の處、珥陵と呼ばれる田舎街に着くのである。

これ迄幾度か車夫は自分を路傍に置いてけぼりにしてお茶を飲むと云ひながら長い時間を消し

て休憩するのであつた。ところで今後はこの街に來ると、やれ草鞋を穿き替へるのやれ飯を食ふのと言つて、又こゝに可なり長い時間を取るのである。

その間自分は青天白日の大旗、翻へる役所の附近やら、又水邊橋上などを逍遙して見た。ところが橋の袂の古壁の上に持つて縣長鄒氏の名に依つてえらい布告文が公示されてゐるのである。見ると路上の衛生を力説し住民は清潔を旨とすべきことを八釜しく説き、若し路上に芥を溜めたり不潔な物を停滞させて置くやうなことをするものがあつたら許さぬ。こゝに特に戒めて置く。若しこの衛生の規約を守らない者があつたときは之を處罰する云々。と大文字に赤丸まで附けて公示して居るのである。

ところが事實はどうかと云ふと、橋畔の路面は實に見るに堪へない汚い物が散つてゐるし、何等縣長の云ふ布告文の文字の精神は徹底してはゐない。布告文は布告文だ。そして現實は現實だといふそこに大變な開きのあることが認められてゐるのである。事實の事はお構ひない。縣長としてこの文字を宣言して置けばそれで宜いのである、としてゐる。又新醫士某氏の名に依つてその開業の廣告宣傳振りが橋畔に出てゐるが、これ亦如何にも自画自讚の極を極め、天下の治療で自分の腕の如く鮮かに又親切に而かも安く出来る者はゐないのだと云つて、之を読む人は齒の浮

くやうな文句を並べてゐるのを見た。

斯くの如くして路上の風物を讀んだり見たりして時間を費やしてゐたのであるが、まだなかに車夫は店に入りお茶を飲み話込んでゐたりしてやつて來ない。彼れ是れ午後の三時を廻つて一時間も経つてからそろ／＼出て來る。

そして言ふことには、自分は急に用が出來たから今から金壇に引返したい、貴下の體は別的小車に轉賣することにした。こんど引受けた車夫は丹陽に歸る人間であるから好都合である。それにあと六十錢だけ渡してやつて呉ればよい。決して更に要求するやうなことはありませんと言ふのである。そして云ふに御都合で、今、自分の見て居る前でその新しい車夫を呼んで來るから手づから六十錢を渡して呉れないかといふ。その言葉は變である。これは一パイ食はされたなと思はないわけでもなかつたが、たいした問題でもないと思つて言ふがまゝに新規の車夫に支拂つてやることにしたのであつた。

しかし支那の車夫は人も知る如く、その常に旅の人間と見ると宜いやうになめてかゝる。掌の中に入れたも同様の取扱ひぶりをして、あとでひどい目に遭はせるのである。

その點ではいつも辛き味をなめさせられてゐるからその時にも自分は駄目を押した。今道半ば

にして先は遠い君はこゝから引返す考なれば先に支拂つてある中を半分この人に拂つてやつたらどうか。幾ら云つてもこちらの云ふことはきかない。どうしても自分のふところにした金は渡すわけに行かない。今からすぐ歸るのだといふことのみを主張してやめぬ。
別にこんな問題で人の手を煩す程のこともないからそのまゝにして云ふがまゝに従ひ此處を立ち丹陽に向つたのである。

この地方は左手の田舎遙かの處に延陵と云へる歴史に名高い處がある。あちこちにと交通の分岐點になつてゐるところで可なり大事な街になつてゐる。従つてこの邊りに車夫運送業を稼いでゐる者は多く摺れからしてゐるものと見てよい。

乗せた客を他の車夫に轉賣するくらゐのことは北支那南支那何れの都城にもいつも見ることであつて珍らしいわけではない。さう云ふ時には必ず譲つた方の人間がうまい事をして、そしてあとの人間はその腹癒せを必ず又客からせしめて搾り取らうとする魂膽活劇を演ずる。恐らくこの筆法でこの時の車夫も双方の間に互に一稼ぎやつて更に又あとで又一稼ぎさせようといふ默契があつたものと察せられる。併し肚の中ではさう思つてゐても表面六十錢で宜いといふことに三人立會で決めた以上はそれで行かれるものとして置かねばならぬわけになる。併しこの取決めと云

ふは、必ず崩れて来て怪しい問題があとから持出される。つまり客のふところを相手に絞り取らうと云ふ肚があるのである。引かゝつたら災難とあきらめなくてはならぬのである。

83 丹陽寶塔紅塵に隠る

丹陽の都城に行かうと、今まで来た土手の上の小徑を辿つた、徑は綠塘を或は登り或は降り、さゝやかな水路に沿つて通じてゐる。

ところ／＼に水邊を背景にしてゐる農家が竹林の間に見える。又その傍には水牛に慣れた子供が二三人、その脊中に鞍も置かないで馴れ／＼しく乗つかつて戯れてゐる場面も見える。

或は又時に哀れにも、五つ六つも長い筏が水の無い運河の中にへたばり固着してゐる所も見え、或は可なり大きい荷物船が荷物を積んだまゝでそれきりになり橋柱から帆をおろさうとしてゐるところが見える。さう云ふ水景の實情を見ると如何にも運の盡きたといふ様子が窺はれるのである。まさかにかう云つた處へ泥棒稼ぎに来る者などはゐないのであらうとは思ふけれども、そは何とも云へない。

車夫は車を押し／＼時折り言ふのである「旦那意外に路が悪くて骨が折れます」などゝそろそ

ろ伏線を張り始めるのである。地平線上の遙か彼方を見ると林煙たなびきて薄ぼんやりとして見えてゐるが、ま正面の方角に當つて大の銀杏の木が圓形の輪廓を見せてゐる。

車からおりて足を速め随分歩むのである。けれどもその距離はなかく近くならない。車夫は相變らず意味ありげな事を言ふ。それからと云ふものは自分は殆んど徒歩で急ぐ。さうして成るべくうつちやらかして取合はないやうにしてゐた。

そのうちにだんだん時刻もおそくなり六時半近くなつて來た。すると一天が俄にかき曇り灰色の景色に變つてしまつた。別段こゝに水蒸氣が増して來たわけでもなく、風に潤ひを感じる。でもない。

やがてだん／＼行くうちにその霧の中に目じるしになつてゐた銀杏の木が近付いて見えて來た。銀杏の木のところを通り過ぎると、又そのうしろの彼方の正面に遙かに丹陽、寶塔の頂が見え始めたのである。

するとその時分からどうしたわけか、蒙古風が俄に吹き始めて來た。車に乗つかつて見たが逆も乗つては居れない。吹き付ける風の力は珍らしい勢で非常なものであつた。そこで又降りて徒歩で土手の路を行く。かうして或は土豪の屋敷内を通りぬけたり、池のそばの小徑を渡つて見た

りなど、可なり速足で、テタ／＼一目散に路を急ぐのである。

幕雲頻りに至り、疾風迅來の蒙古風は空を蔽ふのである。天地は暗膽、うすきみの悪い幕雲の中を勢ひ疾走せざるを得ないやうになつて來た。すると、車夫は兎角、遅れ勝ちになるし、時には二丁も三丁も遅れてうしろから自分について來ることもあつた。

やがて塔下を過ぎ愈々南門から城内に這入つたのである。城内では豫て豫定してゐた惠中旅行社に投宿したのであつた。城内に這入つた時はかれこれ七時過ぎてゐた。モウ大分暗くなつてゐたやつこそさんは路傍で車を止め内儀さんらしき者と會つて言葉を交はしてゐるのである。「あれは君の内儀さんか」と言つたら「さうだ」と答へてゐた。果たしてこの車が丹陽に歸りの車であつたことはこれで判つたのである。

江南の都城を巡つてゐて、地方風とは云へ、斯う云つたひどい蒙古風に襲はれることは珍らしいのである。地方的の氣壓の關係から起るものでもあらうが、大地の黄土と云ふ黄土をば天に向つて捲き上げてしまふのである。何れの方角と云ふことなしに濛々と大陸風の風が吹き來たり紅塵萬丈の大光景を演出し天地は一つにこの紅塵に覆はれてしまつた。帽子も、服も、悉くその粉にまみれて色が變つてしまふくらゐにかぶるのである。

この紅塵萬丈の景色こそは支那でなければ見ることの出来ない風で、如何にも大陸らしき大きい眺めである。かう云ふ體驗を得たのであつた。この日はかりはつくづく陽暮れて道遠しと云つた思ひがして漸くのこと、城内の支那宿に辿り着くことが出来たのである。

その時、車夫の方が胸に一物持つてゐるところから約束のものに色をつけてやつてもなかく粘り強く、自分の側に足手纏ひをしてゐて宿から出て行かうとしないのである。車夫のうるさいことはいつもおきまりであるが、ともかく惠中旅社に落つくことが出来たので極樂の思ひをなしたのであつた。

84 阿片禁制の惠中旅館

丹陽の都城は、上海から鎮江、南京へと走る滬寧鐵路の通過してゐる驛のあるところである。それだけに上海からの交通はかなり頻繁であり、随つて相當開けてゐるべき筈の處である。

若し直接丹陽に向きでもあつて来る者はこれへ直ちに鐵路に依つて来ればわけないところである。ところが自分は幾百千支里の道程をとり、わざわざ水路を此處に求め迂回してこゝまで辿り着いたのである。自分は民情風俗の視察と云ふことだけで別に丹陽に用があつて来たわけ

ではない。

丹陽の惠中旅館に着いた時は夜であつた。目に映ずる丹陽は夜景である。電燈の光は煌々として輝いてゐる。が、しかし宿は可なり舊式であり暗い宿であつた。

上海には租界三馬路に同じ名前前の相當な旅館があるが、これ亦純支那式の旅館であつて、時折り自分は遊びに行つて見るが支那人客を専門に取扱つてゐる。こゝに友人がとまつてゐたので遊びに行つたことは數度ある。之と丹陽の宿とは名を同じうする旅館といふだけのことで、それと何等財的關係があるのではない。

宿に着いてからと云ふものは例の車夫は、自分がこの宿に口添をして置いてあげるからさうすればあなたは優遇せられるだらうとか、此處まで無事に來られたのは自分の努力のたまものだから、種々百方言葉を作つてゐる。その心は泥棒にも遣はず無事に到着し得たことに對し金をよこせといふ腹でゐるのである。

「君は歸り道のことであつたし、あの通りの約束ではなかつたか」と駄目をおし一應言うては見るものも申々言を左右にして頻りにうるさく付き纏うて離れないのである。道のりの半分は乗らないで自分はあの通り殆んど一人で歩いて來たのだと云つてやる。車夫も事實その通りであるこ

とを百も承知してゐるものだから、一面無理をねだつてゐるものゝ、そこに引け目のあることも自覺してゐる。結局のところしきりと自分に二弗よこせと云つてゐた所を半分だけやつて遂に之を追拂つたのであつた。

惟ふに、純樸さうに見えてゐてもかう云つた旅の客を轉賣したり、行路の弱みにつけ込み双方でぐるになつてねだり倒すといつた行き方をするのは昔の箱根八里の雲助と同様である。一種悪徒の心理はかやうに働く。そして客をしきりと窮地に陥れるのである。

やつこさんたちは別に海賊村の流れを汲んでゐるのでもあるまいが、かう云つた悪辣な手段は交通頻繁な處であるとあるまいと、支那車夫風情の間ではいつもあたり前に行はれてゐるものと見なければならぬ。

自分は宿におちつき樓上の一室に部屋を取り決めた。左右の隣室には麗人女客などもゐて、相當はしやいでゐる様子が見えてゐた。窓を隔て、向ふには流れの水音の潺湲と聞えてゐるのがある。

定めし明朝夜が明けたならば、これは佳い眺めのところだらうと思はれたのである。壁に貼られてゐる宿の主人の注意書を見るとかうある。「阿片膏並に阿片吸食器を持込んで貰つては宿の方

では迷惑をする。その筋の注意もあることゆゑ特にこの點は御勘辨を願ひたい。云々」といふ言葉が見えてゐるのである。

由來南京の支那宿あたりではもつと色々の事が記されてゐる。賭博の道具を持込む勿れ、藝者連れ込む勿れ、銃器彈藥を持込む勿れなど、やかましい規則を掲示してゐることの外に、尙ほ城内に住む中國人の保證人を立てなければ止宿すること相成らぬとか、又旅行の目的はどう、幾日間の滞在するか、宗教は何教を奉ずるかなど、彼れ此れ二十ヶ條に亘つて嚴密に列記しなければとめないことになつてゐるのである。

近來南京の旅館は特にその點にむづかしい取決めが出来てゐる。それに比べると、この丹陽は田舎宿のこととてそこまでのことは云つてゐなかつた。

旅の空、片田舎の宿に夜分暗路を辿つて訪ね來る時の氣持は人により、随分奥底の知れぬ獄屋の中を辿る如き氣持もすることであらう。ところが併しこれはどこにしてもその氣持の知れない片田舎をあるく旅には、あり勝ちのことであつて、特に薄氣味がわるいと云つてそれを氣にするにも及ばないのである。

85 支那街の暗路

支那宿の夜はどんなものか。こは中々複雑で簡單には云へぬと云ふが本當である。グロがありエロがあり、その五官を超越したるものには阿片がある。その煙が満ち／＼てゐる客室があり。そこには一種支那獨特の臭氣が漲つてゐる。故に之を氣持よく感じない人には奥底の知れない物凄さを聯想せしむる。又とまつて見たつて一刻もその場面にゐたくまゝ氣持さへしなくなるであらう。

支那の田舎街は街路に電燈を點けるゆとりを有しないのが多い。又之を無用の事としてゐるところもある。片田舎の村里の街では夏の夜など行つて見ると、たゞ蚊遣り煙が濛々と渦を捲き巷街に漲つてゐる状態を見る。南支では之に蓬を束ね螺旋形にした三四尺もあるものをぶら下げた地方がある。その最下部のところに燻らせると、そこからちり／＼火が上の方へ移りながら上つて行くのである。

これは部屋の中にあると又窓外に出るとの別なく設けられてゐる。之が徹宵煙を燻らせてゐることにもなつてゐる。そばに行くと、とても目もあけてゐられないくらの痛みを感じる。

支那の田舎街で夏の夜を過ごして見ると住民は、その上半身を裸體姿にして街路に出てゐる。そして大きな漉團扇をパタパタ使つてゐる音と談笑してゐる聲とで賑やかである。その中に立ち混つて見ると、何となく力強い線の太い感じを受けるのである。その元始的なところが面白い自分は別段かう云つたところを物凄いと感じてゐない。むしろ如何にも原始的な氣分に打れたいやうな氣持がするのである。

春の田舎街の夜分はそれ程でもない。たゞ街路に火のつけられてないことが勝手の判らない暗路を辿る上に都合悪く感ずるに過ぎない。又顔の見えてゐない暗闇みの人影に向つてはいくら何でも迂つかり言葉を掛けて見ようなどいふ氣にもならぬ。かけて見ても氣樂なわけであると言へばそれまでである。が、さう云ふところでは氣持が一種變なグロの氣持に打たれる。

さう云つた氣持を自分でひとり味ひながら、この丹陽の夜路を歩いて見る。すると街の折れ曲つた處、路面の登り加減になつたところに、茶館、麵屋の煤けたのが二三軒並んで見えるのである。その先の力は暗くてわからぬが大きな橋のかゝつてゐるところらしい。橋の袂に行つて見ると市中を警備する例のピストルを帯びた兵隊が群がつかつてゐる。

支那町は街路でも火車の中でもいつもこれだ、ひとりあるいてゐて思ひがけもなく夜の橋畔に

武装兵の群を見るなどは物々しい感じを起させる。その暗路の中に暗を破つて兵隊の語る聲の聞えて来るは何處となくグロである。暗黒世界そのまゝの消息を物語る感じがする。自分は努めて城内をあちらこちらと夜の気分を探るべく路をあるき行き當たる處まで歩き通して見た。そして結局おそく宿に歸つて来た。宿の番頭と熱茶を啜りながら、地方の風物人等について語り又色々と教つたのであつた。けれどもその間自分は日本人とも東洋人とも云はず常に支那名を何處までも振り廻し宿帳に記入した「藤石農」の名前で黒頭巾でやり通した。そこに却つて自分ながら興味深く感じたものがあつたのである。

蒋介石氏は西安半月記を最近に公にした。これによると同氏が昨、民國二十五年二月西安に客中夜半に勃發した事件の、伍一什が明白に理解される。蔣氏が自國內を安心して動いてゐてさへかやうなクウデタが青天の霹靂として起つた。蔣氏の言をかりると張漢卿（學良）の今日（十二月十一日）の様子はそれはそれは、氣はうつとりしてゐるのに、余は甚だ不思議に思つた。恐らく昨日彼が余のもとに来て、余の譴責を受けたことを不快に思つたのではないだらうか？或は余が黎天才に訓責した言葉を聞いて不安に思つたのではないだらうか？しばらく熟慮したが、その原因が判らず時間も遅くなつたのでその日はそのままに放置しておいた。

さうして翌十二月十二日早朝五時半床上の運動を終り、衣服をつけやうとしたところ、突然宿所の大門前で銃聲が聞えた。云々の事が日記に見えてゐる。自分が土匪村を行脚し海賊村を巡り行くにも奥地の治安に不安を抱くならそこに色々の想像も出来る。しかし丹陽の夜泊一刻といへども支那を愛する氣持は毫も變らぬ。蔣氏以上に長閑かな心境にあつた事を思ひ出すのである。

著者執筆の主なる既刊書を参考のため、左に列記して置く。

書名	発行年月日	定價
1 翰墨行脚	昭六、二、三〇	三、五〇
2 支那遊記	ク三、二、三三	三、五〇
3 支那及滿洲旅行案内	ク七、五、一三	四、五〇
4 支那文化の研究	大四、六、二六	五、五〇
5 支那趣味の話	大三、九、一	三、〇〇
6 面白い支那風俗	ク三、八、一	二、〇〇
7 支那風俗の話	昭三、九、二	二、八〇
8 支那文化の解剖	大二、四、五	三、五〇
9 お隣の支那	昭三、九、二〇	一、八〇
10 長城の彼方(絶)	大二、五、一五	一、八〇
11 支那料理の前に	大二、五、一	一、八〇
12 支那民情と語る	昭五、六、一〇	四、五〇
13 支那の社會相(絶)	大五、二、一〇	五、〇〇
14 支那風景と庭園	昭三、三、五	二、〇〇
15 文字の史的的研究	ク五、六、一〇	二、〇〇
16 硯及筆墨紙研究	ク五、九、五	二、〇〇
17 硯の栞	大二〇、六、五	一、〇〇
18 支那旅行通	昭五、三、五	七、〇〇
19 支那料理通	ク四、一、二六	七、〇〇
20 支那今日の社會と文化	昭二、六、一〇	一、〇〇
21 支那勞働階級の生活	昭五、二、三〇	一、二五
22 中華民國地圖	昭四、二、五	一、〇〇
23 翰墨談(絶)	昭四、五、一〇	四、〇〇
24 長生秘術(絶)	昭四、三、二	三、五〇
25 支那の山水	昭八、三、一〇	二、八〇
26 哲人支那	昭五、二、一	一、五五
27 支那民情	昭六、二、一五	三、〇〇

28 支那行脚記(絶)	昭三、二、一	二、三〇
29 支那風俗趣味(絶)	昭五、一〇、五	二、〇〇
30 支那社會民情(絶)	昭五、一〇、一五	二、〇〇
31 阿片室(絶)	昭三、二、五	二、五〇
32 青龍刀(絶)	昭三、二、五	二、三〇
33 眠れる獅子(絶)	昭四、五、一五	二、三〇
34 日本より支那へ	大三、一〇、三〇	五、〇〇
35 支那田舎めぐり	大四、八、六	五、〇〇
36 歡樂の支那	大四、三、二四	五、〇〇
37 不老長生	昭三、六、七	五、〇〇
38 長久の支那	昭三、一、一四	五、〇〇
39 老朋友	昭三、二、七	五、〇〇
40 文字の研究(絶)	明四、三、二〇	四、五〇
41 文字の沿革(建築篇)	明四、三、二〇	二、〇〇
42 文字の起源(絶)	大五、五、九	二、〇〇
43 文字の沿革(絶)	大五、五、九	四、二〇
44 支那の國民性	明三、八、一〇	一、〇〇
45 教壇上の漢字(絶)	明四、七、一	一、三〇
46 文字の教え方	大七、二、三三	一、五〇
47 文字の活用	明四、九、五	一、八〇
48 漢字音の系統	明四、六、三三	一、二〇
49 明治の漢文(絶)	明四、一、一〇	一、五〇
50 言語學(上下)	明四〇、四、三九	一、一〇
51 現代支那語學(絶)	明四、三、一八	四、五〇
52 線音双引漢和字典	大三、五、二	二、七〇
53 標準字典	昭三、二、一〇	二、二〇
54 自修字典	大八、四、一五	一、〇〇
55 文字學概説(國語釋學)	昭八、一〇、一	非賣品
56 漢字の教授法	明四、七、一〇	同上
57 漢字の生立ち(テキスト)	昭五、二、一〇	一、〇〇
58 滿支の全局	昭八、一〇、一	非賣品
59 支那讀本	昭八、三、一五	一、二〇

60	問題の支那	昭八、一〇、五	一、三〇
61	進南子(國譯漢文大成)	大二〇、四、二	非賣品
62	支那の體臭	昭八、九、三	一、五〇
63	滿支風景庭園鑿	昭九、三、七	八、〇〇
64	支那の庭園	昭九、一〇、一〇	一、五〇
65	文字の研究	昭一〇、一、三	八、五〇
66	支那風土記	昭一〇、三、三	二、五〇
67	五十年後の大平洋	昭一〇、六、一〇	一、六〇
68	翰墨談(抄本)	昭一〇、六、一八	二、五〇
69	滿支視察ありのまゝ	昭一〇、八、六	非賣品
70	支那家庭論語	昭一〇、一一、二五	一、三〇
71	初等漢字の教へ方	昭一〇、五、五	二、〇〇
72	日支親善工作	昭一一、一、〇	三、〇〇
73	支那民俗の展望	昭一一、五、一八	三、〇〇
74	不祥事と日支親善への途	昭一一、九、二八	非賣品
75	支那秘境を巡りて	昭一一、二、二四	非賣品

76	文字行脚	昭一二、二、三〇	三、〇〇
77	最近の中華民国を語る	昭一二、一	非賣品
78	改訂漢字音の系統	昭一二、二、三三	二、五〇
79	文房至寶	昭一二、六	三、五〇
80	土匪村行脚	昭一二、七	二、八〇

本目錄掲載の圖書は北斗書房代理部にて便宜御取次いたします。



昭和十二年六月廿七日印刷
昭和十二年七月一日發行

土匪村行脚

〔定價二圓八十錢〕

著者 後藤朝太郎

發行者 黒田茂雄

東京市麹町區飯田町一ノ七

印刷者 中島久

東京市芝區清松町四ノ五

東京市麹町區飯田町一ノ七

發行所 北斗書房

振替東京七三一三二
電話九段三八七二

12.10.1937. ~~III~~

17.3

713
196

12年 9月 20日 110

飛
...
...
...
...
...
...
...
...
...

開濟

